



題字は、明治 39 年 10 月 1 日陸軍大臣寺田正毅から外務大臣林薫宛に提出した文書（外交史料館所蔵）より抜粋。
 紋様は、尾形光琳：『八橋蒔絵硯箱』東京国立博物館所蔵より。



2002年9月1日
 東京湾海堡ファンクラブ設立総会に集まった会員。
 （富津市公民館にて）

かいほう
東京湾海堡ファンクラブの設立

東京湾海堡ファンクラブ設立の呼びかけ

目的

東京湾海堡を核にして人の輪をつくり、海堡の歴史の検証、遺跡の整備と愛護、有効な活用の促進に努めるとともに、人々の親睦と交流を拡大し、東京湾口のランドマークとしての理解を深め、東京湾の歴史と未来をつなぐことを目指す。

事務局（案）

〒110-0015 東京都台東区東上野 2-7-6 東上野 T.I ビル
 (株) 地域開発研究所内
 電話 03-3831-2916 FAX 03-3836-4048

設立日

2002年9月1日

活動

- ①研究会の開催。
- ②会報の発行（年4回）。
- ③東京湾海堡に関する資料・情報の収集。
- ④その他、東京湾海堡への理解と愛護を深める活動。

会費（案）

年間 個人会員 1,000 円、法人会員 1口 10,000 円

海堡と歴史

日本は打ち寄せる波濤と共に、海上から明治の文明開化を迎えた。こうして直面した国際化にともない、海外からの侵攻が憂慮され、国土を守るため、東京湾口に人工の島を築き、砲台を備え、これを海堡と呼んだ。

東京湾海堡は、過去においては、大艦巨砲時代の首都防衛の要塞になったが、現代を迎えてからは東京湾口のランドマークになった。未来における東京湾海堡は遺跡であるとともに、国土防衛と海民文化の情報集積や発信の砦となることが期待されている。

この東京湾海堡は、富津岬の先端に近い第一海堡と、その西方の第二海堡、さらに、その南方の第三海堡の三つがある。明治元年(1868)に江戸が東京と改称され、江戸前は東京湾と呼ばれるようになり、東京湾は首都の門戸となり、防衛上からも重視された。明治 11 年(1878) 7 月に陸軍卿の山県有朋が中心になり、陸軍参謀局内に国土守備の拠点づくりを課題とする海岸防御取調委員が設けられた。その結果として各地に砲台を建設することになった。陸軍教師長ミュージーや西田明則陸軍工兵少佐が尽力し、東京湾の場合は陸上砲台のほか、火砲の射程能力が考慮され、富津岬と三浦半島の間の海上に、さらに 3ヶ所の砲台が必要と判断され、3個の海堡が建設されることとなった。

当時は明治前期の大艦巨砲時代だったので、第一海堡は侵
攻戦艦を対象に明治 14 年(1881)8 月に起工し、明治 23 年
(1890)12 月に完工した。地籍は富津市黒塚である。続いて第
二海堡は明治 22 年(1889)8 月に起工され、大正 3 年(1913)6
月に完工し、富津市洲端すばたに属した。さらに、横須賀市走水の
沖にある第三海堡は、明治 25 年(1892)8 月に起工し、大正 10
年(1921)6 月に完工し、横須賀市に属した。第三海堡は竣工
わずか 2 年後の大正 12 年(1923)9 月の関東大震災で水没状態
になり、現在、国土交通省により撤去工事中である。第二海
堡も関東大震災で建物が壊滅的な被害を受けたので、火砲が
徐々に他の砲台に移設され、昭和 7 年(1932)にすべての大砲
が第二海堡から除去された。3 海堡いずれも潮流の激しい海
中での大工事で、基礎に三浦半島産の石を沈めて輪状の堤防
を造り、伊豆石で外部を張り固めながら、そこに富津や横須
賀からの土砂を船で搬入して構築した。

東京湾海堡は、航空機時代を迎えてからは、明治政府が残
した歴史的構造物になった。巨大な経費と時間を要した砲台
だったが、実戦の効用は極めて少なく、太平洋戦争の後半期
に第一海堡と第二海堡に対空火砲の陣地が置かれた程度で、
軍国日本の解体となる昭和 20 年(1945)8 月 15 日を迎えた。

私たちは、このような歴史を経た海堡の愛護・整備活用を
目指す。

2002 年 8 月 23 日

発起人

高橋在久 (東京湾学会理事長・江戸川短期大学名誉教授)

西田好孝 (東京湾海堡建設従事者子孫代表)

仲野正美 (横須賀市立北下浦小学校教頭)

安室真弓 (東京湾学会理事)

小坂一夫 (富津市文化財審議委員)

松本庄次 (富津公民館長)

小沢洋 (富津公民館主査)

島崎武雄 ((株) 地域開発研究所)

東京湾海堡ファンクラブ設立総会 式次第

日時：2002 年 9 月 1 日 (日) 13:00～

場所：富津公民館 (千葉県富津市)

1. 開会のあいさつ [発起人代表]
2. 会則の提案と審議 [仮事務局]
3. 役員を選任 [仮事務局]
4. 活動計画と予算 [事務局]
5. 設立記念講演 [高橋在久氏]
6. ビデオ上映『第三海堡物語』: 国土交通省 東京湾口航路

工事事務所制作

7. 閉会のあいさつ 役員代表 [西田好孝氏]
8. 富津岬見学 (希望者) 現地解散

東京湾海堡ファンクラブ設立記念講演

「東京湾口の海堡の魅力」

東京湾海堡ファンクラブ会長 高橋在久



東京湾学へ

私は、海が舞台の東京湾学を 40 年ぐらい前から構想しはじめました。伝承資料を基礎にした民俗学という柳田國男先生を先達とした学問がありますが、私は晩年、直接、先生から指導をいただいたり、東京湾学自体の示唆をいただいたりという幸運に恵まれました。

それがきっかけで、東京湾を核にした文化史を考える学問として、「東京湾学」という看板を考えました。私は、あくまでも民俗学を軸にした文化史という立場でございます。「東京湾学」という看板を掲げましたが、私の目標は、東京湾を核にした沿岸地域、水圏地域の文化史の解明であります。そして、いま一つは、東京湾の未来史の考察までやることを私自身の課題に決めました。

私は、約 30 年間、千葉県立の博物館長や美術館長、それ以前は文化財保護行政を若い駆け出し時代からずっとやりまして、その後、私立大学の教壇に 15 年ほど立ちました。その間、相変わらずふるさとの海である東京湾にこだわりまして今日に至っています。

私の言う文化史というのは、あくまでも人間の生き方の歴史であります。説明的に申し上げますと、「これまでそれぞれの地域で普通の人たちがどのように命を守り、そして、生活を満たしてきたか。」といった視点から、小さな身のこたえを窓にしながら、あくまでも学際的に、狭い専門領域にとどまらない、周辺のいろいろな関係ある学問 (民俗学、考古学、

歴史学、地理学、気象学、生物学など）の研究成果を活用しながら総合的に整理し、そして、東京湾を中心にした問題の理解を図っていくことです。しかも、結果は独占しない。また、仲間うちだけの公開ですませないで、あくまでもこれを大衆化し、社会化することに努めてきました。その大衆化・社会化とは、新聞、ラジオ、テレビ、雑誌などの手段を用いて行ってまいりました。若いときから、そのような手法でやってまいりました。

東京湾海堡の生い立ち

さて、このたびの対象である「東京湾海堡」というのは、海中に築いた人工の島の砲台です。私たちの日本列島に、打ち寄せる波濤とともに150年ほど前（正確に言えば149年前の嘉永6年6月3日、新暦では7月8日）、この富津の対岸である浦賀沖にアメリカの東インド艦隊指令長官、ペリーが来航いたしました。ペリーが来航してから、明治の文明開化、国際化の時代を迎えました。当時の人々は歓迎もしました。また、識者は緊張もいたしました。

こうして明治時代の東京湾は、富国強兵策あるいは殖産興業策をめざした日本の文字通り首都：東京の国際的な門戸になりました。東京湾は大きな港になったと言ってもいいと思います。当時、海外との連絡は海上交通によるほかにありませんでした。軍事的には大艦巨砲時代であります。

そのようなわけで、国際的に東京湾の重要性は急激に増大しました。この時代に海外からの首都：東京への侵攻を防ぐため、たいへんに苦心しました。それ以来、海岸での帝都防衛策として各所に要塞を必要としました。東京湾口の海堡は、こういう時代と動向のなかで生まれました。

この歴史のなかには、何人かの先賢たちがいらっしゃいました。当時の中心の方で中心的に活躍なさった西田明則、その子孫の西田さんも今日、お見えでございますが、そのほか何人かの先賢たちが文字通り苦心惨憺を続けて、沿岸の普通の人たちの献身を受けながら、第一、第二、第三の海堡が実現したわけであります。なお、江戸時代の幕末には、ペリーの来航が動機で、江戸の前面の海中にお台場が建設されました。いまは第三台場と第六台場の二つの人工島が残っております。お台場の名とともに変わった立場で市民に愛されながら残り、第三台場の場合は地続きになりまして、現地に行つて実感を深めることもできます。

第二海堡を上陸見学

私たちは去る8月21日、先ほど、富津公民館の松本館長からお話がありましたように、国土交通省の東京湾口航路工事事務所のご好意で、この公民館の東京湾学講座のメンバー

有志とともに第三海堡の撤去工事現場と、さらに我々が念願だった第二海堡の上陸見学をしてまいりました。実は、私はその第二海堡へ上陸したのは28年ぶりであります。せっかく探訪するわけでもありますから、28年前のいろいろな資料を掘り起こして持参したわけでもあります。

実は、去る6月16日に同じメンバーで、富津公民館の東京湾学講座主催で東京港のお台場を見学したことがあります。そのときの印象と8月21日の印象をひそかにいろいろ比較いたしました。いろいろな比較ができますが、視覚的に海堡の建造物としての違いを感じました。先ほど、島崎さんから、第一海堡はロシアのレニングラードのクロンシュタット海堡を手本にしたという話が出ましたが、東京湾海堡は、建造物としての国際性から見ますと、江戸前の第三台場と比べ、たいへん大きな差があることを印象として受けて帰りました。

さらに私が痛感しましたのは、国土を守るために研究・実践なさった先賢たちと同時に、波濤の上で労働した普通の人たちのことです。波の上で喜怒哀楽を共にしたのは先賢も普通の人たちもみな同じだったと思います。喜怒哀楽をともにしながら、ときには大声を發し、ときには沈黙したかもしれません。私は打ち寄せる波を見ながら独り静かに明治の人たちの声が刻々と迫るような思いを深めたわけでもあります。

実は、今年は私にとりましては海堡の当たり年であります。海堡の当たり年というのは変な表現ではありますが、8月21日にこの東京湾講座で東京湾口工事事務所のご好意で上陸見学しました。その1日おいた8月23日にも、私は第二海堡へ上陸する機会をいただきました。地域開発研究所のご好意がもとになりまして、横須賀市の国土交通省東京湾口航路工事事務所を訪ねました。本日の設立総会のこともありましたので、工事事務所に協力要請もあったわけですが、小野寺幸夫所長さんたちといろいろ懇談したあと、せっかくだからということで第二海堡へ船を出していただきました。私は、1日置いて今年は2度も第二海堡に上陸し、見学することかできました。思いは先ほど申したことと同じでありましたけれども、今年は海堡の当たり年でありました。

さらに、追浜のヤードには、第三海堡から撤去し陸揚げした1500トン級の鉄筋コンクリート造りのケーソンや兵舎など巨大な構造物が展示されておりました。これはまた見学する機会があるそうですから、皆さんと一緒に実感を深めたいと思います。とにかく、私は東京湾口の海堡の受けとめ方は大事だと思います。私は、あくまでも海堡は国土の防衛史上、無視できない重要な要塞の遺跡だと考えております。そのことは本日の資料「東京湾海堡ファンクラブ設立の呼び

かけ」に「海堡と歴史」ということで概略を述べております。実は、もう一面の東京湾学から見た海堡の意義をぜひとも追加してもらいたいと思います。これからの活動のうえでも、このファンクラブの基本になるのではないかと思いますので、あえて提言申し上げます。それは海堡の文化性あるいは現代性ということができると思います。これを追加し、整理しておいていただきたい。

東京湾海堡の文化性と現代性

東京湾海堡の文化性・現代性というのは次のようなことです。東京湾の沖合漁業者は海上で自分が採りたい種類の獲物のある漁場や危ない場所の位置を覚えておくため、いくつかの目標を定めております。海に近いところに1ヶ所、海から遠い先にある山や大きな建物、それを左右両方向に「地山」とか「遠山」とかいろいろな呼び方をしますが、それが重なり交差する具合で海上の位置を知る。これらは、「アテの漁法」の目標で「ヤマ」とも言います。沖合漁業の人たちは、そういうヤマの伝承を基本に、つい最近まで生きてまいりました。海堡は、その大事な目標の一つ、身近な目標の一つになっておりました。海堡と三浦半島の山、房総半島の鋸山とか鹿野山との重なり具合で位置を知る。海堡がアテの漁法の大事な拠点になっていた。すなわち、普通の人たちの生活の拠点になったという歴史があったということであります。同じように、東京湾口を出入りする艦船は非常に数が多い。1日に700隻、800隻といった数字が挙げられておりますけれども、大きな外国航路の艦船にとっても航行の安全のための重要な目標になっている。こうした海堡なるがゆえに、海堡の現代性という言葉で、この海堡を受け取っているわけです。

そのような立場から、さらに「ランドマーク」という言葉、これら、地域の象徴あるいは目標といってもいいのですが、そのような言葉で海堡、それに連なる富津岬、西側では観音崎、旗山崎、猿島という一連の東京湾口の標識になったものを、私は「ランドマーク」という言葉で総括しております。防衛遺跡という一面と地域の標識という一面を合わせて、それを「ランドマーク」という言葉で総括し、これからもうまく活用を進めたいと思っているわけです。

ファンクラブの活動

この海堡はいま、さまざまな環境下にありますが、ぜひともこの二面性を理解し、「要塞という歴史性」と「標識という現代性」の二つを基礎に、これからファンクラブの活動をしていったらいいのではないかと考えています。

「東京湾学」という学際的な地域学で、海堡のある東京湾はようやく学問の舞台になり始めました。その海堡は本日から

人の輪で回想と期待の砦になるのではないかという思いも今わいてきております。確実にそうなると私は思っております。したがって、当面、願いたいことは、東京湾口のランドマークであるこの海堡を、国土交通省によって航路の安全のために修復・整備を進めていただきたい。あるいは、文部科学省に史跡に指定していただき、ともに愛護、活用を基礎になるように実現を願いたい。これは海堡ファンクラブの社会的な目的とも言えることではないかと思っております。

そういうわけで、ますます人の輪を広げて、クラブの目的を十二分に発揮していきたいという思いで一杯であります。海堡の魅力と現代的な意味を申し上げました。よろしくお願いたします。

ファンクラブへのメッセージ

吉本充さんという千葉県会議員がいらっしゃいますが、昨日、私の手元へメッセージをいただいておりますので、読ませていただきます。実は、この吉本県議員さんは、富津市の選出で去る6月の千葉県議会本会議で富津第一海堡、第二海堡の史跡指定の問題、富津岬の保護の問題、あるいは活用方策などで非常に積極的な提案をなされた。このように、海堡には非常に関心をお持ちの県議員であります。その吉本議員からのメッセージです。



「東京湾海堡クラブ設立おめでとうございませう。ともに愛護と活用に進めたいと思ひます。」

わずか2行ですが、名刺にこういうものを書いて私のところへ届いております。いろいろな方の力を借りませんと、念願も具体化いたしませんので、ありがたく皆さんとともに受けたいと思います。

以上

東京湾海堡ファンクラブ設立総会

閉会あいさつ

東京湾海堡ファンクラブ副会長 西田好孝



私は、ただいまご紹介いただきました西田好孝と申します。今まで、いろいろな経過はございましたが、先ほど、高橋会長からのご報告も含めて、本日の設立総会の閉会にあたり私としては、万感、胸に迫る気持ちでございます。

と申しますのは、いま、ご案内いただきましたように、私は西田明則の曾孫ということになります。明則の長女でありました西田イエが小坂家に嫁ぎ、その孫のおさかじょうよ小坂丈予とともに私は活動しています。小坂は、少し足が不自由なので今日は出席できませんでしたが、皆様によるしくとのことでした。いずれ、東京で、ファンクラブの活動がある時は出席して、何かお話ができればと考えております。

本日で東京湾海堡の輪がものすごく広がったように感じました。私も小学校5年まで横須賀にいましたが、そのころは親に西田明則のお墓参りに連れて行かれるぐらいで、終戦になってから、いろいろな海難事故があり、海堡のことを父が話してくれました。

その中から横須賀郷土史家の仲野先生から地元紙の新聞の切り抜きをいただきました。そこに、「第三海堡ようやく撤去」という大きな見出しが出ておりました。もちろん、撤去されるということは昭和30年代から知ってはおりましたが、その時のニュースは漁協と話し合いがついて撤去できるようになったということだけでした。

そのときに、私はこれでいいのかなと思いました。西田明則は自分の祖先ですし、出身は岩国市の吉川藩でした。そこからスタートして私なりに資料を集めていたところでもありましたので、2、3年前、正式に撤去が決まったころ、当時の運輸省港湾局の企画課長にアポイントなしで面会に行きました。

第三海堡について、「危険なことなので撤去する意味はよくわかるが、どういう経緯で、どういうことがあって造られたか

ということをご存じでしょうか。」という話をしました。その時、課長は「全然、知りません。」ということでした。それで、経緯を知っていただきたく、資料を差し上げました。

その後、横浜の港湾建設局にご指示いただき、新しい東京湾口航路工事事務所の初代所長の朝倉光夫さんにお会いし、ご理解を得てビデオ・冊子を作っていただいたりして、その歴史的な意義を皆様とお話し合いいただけるようになりました。そこで、私はいま万感の思いがあると申し上げたわけです。

いま現在、撤去工事に関しては無事に進むことを願っております。撤去工事は7年計画とお聞きしておりますが、そこに至った経緯を検証していくことも必要だと感じております。ご当地、富津市の大乘寺に海堡建設工事の犠牲者の碑がありますが、その検証も必要なことと思います。高橋会長のお話がありましたが、東京湾海堡を史跡に指定との動きもあるとのことなので、会としてもバックアップしたいと思います。ここまで輪が広がったことを私としても本当に喜んでおります。撤去するだけで終わってしまったのではないかと思うと、ほっとしているところです。これからも、皆様とお話し合いしながら、いろいろなことを教えていただき、また、ご協力をお願いしたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

以上

◆ ニュース ◆

<文化財としての東京湾海堡>

最近、文部科学省の文化庁によって保存する価値のあるなしを判定するため、早急に詳細な調査をすべき50ヶ所の近代遺跡が選定され、そのなかに東京湾口の第一、第二海堡と、富津岬の根っこにある同時期につくられたもとす元洲砲台さらに、観音崎砲台、猿島砲台など11ヶ所が入っていることが、情報として私の手元に送られてきました。これは何年かかりますか。実は、私たち富津市の文化財審議会としては、この問題を史跡として市が指定しても、県が指定しても、国が指定してもいいではないかということで、去る8月7日から現地調査を市の文化財審議会として始めております。文化財的な環境から申し上げますと、第一海堡や富津元洲砲台はいま、そういう状態に置かれています。これも一つの情報としてお伝えしておきたいと思います。

なお、この調査の過程で、明治23年(1890)11月5日、7日、8日の朝日新聞の記事を千葉市の高木義雄さんから私あてに送ってくれました。私がいつも東京湾学会でこの海堡の

問題を話題にしているものですから、わざわざ送ってくださったのですが、その記事を見ましたところ、富津砲台が落成したので明治23年(1890)11月11日、皇帝陛下が横須賀鎮守府に臨御され、水雷艇で砲台の大砲試射の天覧が決定したとあった。その11月11日の模様を伝える記事はありませんでしたけれども、とにかく3日間予報が記事になっていた。これを情報としてお伝えしておきます。これは富津砲台、すなわち元洲砲台だと思います。(高橋在久)

◆ 資料 ◆

〈第一海堡と富津岬がつながっていたころの写真〉



昭和39年(1964)春、高橋在久撮影：車が第一海堡に横付けしている。(写真の中央右、第一海堡のふもと)



昭和39年(1964)春、高橋在久撮影：第一海堡から富津岬を臨む。

◆ お知らせ ◆

◎ホームページの開設

東京湾海堡ファンクラブのホームページを開設しました。

アドレスは、<http://www.wup.jp/~kaihoufc/> です。

(～(ルガ)は「Shift」を押しながら「々」を押すと出ます。) ホームページでは、①活動報告 ②見学会・フォーラムのご案内 ③入会申込みなどを掲載する予定です。少しずつ内容の整備を進めてまいります。

◆ 見学会・フォーラムのご案内 ◆

★ファンクラブ見学会(第1回)

— 東京湾海堡建設功労者の西田明則の碑と

東京湾口航路工事事務所見学 —

日時：2002年11月9日(土)10:30～15:00

集合場所：国土交通省東京湾口航路工事事務所〔横須賀市平成町3-21-44 tel.0468-28-8366〕<10:30 時間厳守>

見学コース：国土交通省東京湾口航路工事事務所→(海上より第二・第三海堡見学)→国土交通省東京湾口航路工事事務所(第三海堡展示室)・うみかぜ公園(昼食)→衣笠公園・西田明則君之碑→衣笠駅 or 久里浜港で解散<15:00 予定>

申込み方法：希望者は氏名と連絡先(できれば携帯電話)・「11月9日見学会参加希望」の旨を電話、FAX、E-mailのいずれかの方法で事務局宛にご連絡ください。〔締切11月5日(火)〕

〔(株)地域開発研究所・高橋悦子 TEL.03-3831-2916

FAX.03-3836-4048 E-mail: kaihoufc@wup.jp〕

参加費：会員の方は無料。非会員の方は1,000円。

参加される方は各自昼食をご持参ください。

※雨天決行 ※天候、参加人数などにより行程・終了時間が変更になります。あらかじめご了承ください。

◇富津から参加される方の交通機関◇

金谷発9:15の久里浜行きフェリーをご利用ください。9:50に久里浜港に着きますので、タクシーで東京湾口航路工事事務所に行ってください。(料金2,000円程度) タクシーに行き先を伝える時は、「平成町のhideミュージアムの隣、国土交通省の東京湾口航路工事事務所」と説明してください。

◇横須賀中央駅からの交通機関◇

京急線の横須賀中央駅からタクシーで650円程度です。タクシーに行き先を伝える時は、「平成町のhideミュージアムの隣、国土交通省の東京湾口航路工事事務所」と説明してください。徒歩では18分程度かかります。(下記地図参照)



<http://www.pa.ktr.mlit.go.jp/wankou/index2.html> より。

★海堡フォーラム（第1回）

日時：2003年1月25日(土)13:00～15:30（予定）

講師・テーマ：（未定）

場所：台東区東上野区民館（上野駅徒歩5分）あるいは、台東区学習センター（入谷駅徒歩8分）

※ 詳細は12月にお知らせします。

東京湾海堡ファンクラブ会則

第1条（名称）

当会の名称は、「東京湾海堡（とうきょうわんかいほう）ファンクラブ」とする。

第2条（目的）

当会は、東京湾海堡を核にして人の輪をつくり、東京湾海堡の歴史の検証と普及、遺跡の整備と愛護、ランドマークとしての理解を深め、東京湾の歴史と未来をつなぐことを目的とする。

第3条（事業）

当会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 東京湾海堡に関する研究会、講演会、見学視察会の実施。

(2) 会報の発行（年4回）。

(3) 東京湾海堡に関する資料・情報の収集。

(4) その他、東京湾海堡への理解と愛護を深める活動。

第4条（会員）

当会の目的、事業に賛同する個人または法人（グループを含む）を会員とする。

第5条（入退会と会費）

当会に入会しようとするものは、入会申込書により会長に申込むものとする。会長は、正当な理由がない限り、その入会を認めなければならない。当会を退会しようとするものは、退会届けを会長に提出し、任意に退会することができる。

会員は、下記の年間会費を納入する。

年間会費は、個人会員1,000円、法人会員10,000円とする。

会費は、毎年4月に支払うものとし、会費を支払わないときは退会したものとみなす。

既納の会費は、いかなる理由があっても返還しない。

第6条（総会）

総会は、当会の議決機関であり、年1回の通常総会および臨時総会とする。

(1) 総会は、会員をもって構成する。

(2) 総会は、会員の過半数を定足数とする。ただし、定

足数については委任状をもって代えることができる。

(3) 総会の議決は、出席した会員の過半数の賛同をもって行う。可否同数の場合は、議長の決するところによる。

(4) 会長は総会を召集し、総会の議長を勤める。

(5) 総会は、前年度の事業報告および収支決算の承認、当年度の事業計画および収支予算の決定、役員を選任、会則の変更、解散、合併、その他総会または役員会が必要と認める事項について議決を行う。

第7条（会員の権利）

会員は、次の権利を有する。

(1) 総会に参加すること。

(2) 研究会、講演会、見学視察会に参加すること。

(3) 会報の無料配布を受けること。

(4) 収集した資料・情報を閲覧すること。

(5) その他、当会が行う東京湾海堡への理解を深める活動に参加すること。

第8条（資格の喪失）

会員が次の各号に該当するときは、その資格を喪失する。

(1) 退会したとき。

第9条（役員）

当会は、役員として、会長1名、副会長1名、幹事（事務局長）、幹事（会計）を含め、15名以内の幹事をおく。

役員は会員から総会において選任する。役員の任期は通常総会から次の通常総会までとするが、再任を妨げない。

第10条（役員の職務）

会長は、当会を代表し、その業務を総務する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。

役員は役員会を組織し、当会の業務を行う。

第11条（会計）

当会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第12条（事務局）

当会の事務局事務所は、東京都台東区東上野2-7-6 東上野T.Iビル（株）地域開発研究所内におく。事務局には事務局員若干名をおく。事務局員は会長が選任する。

第13条（付則）

当会則は、2002年9月1日から実施する。

役員

会長 高橋在久（東京湾学会理事長・江戸川短期大学名誉教授）

副会長 西田好孝（東京湾海堡建設従事者子孫代表）

幹事 仲野正美（横須賀市立北下浦小学校教頭）

- 幹事 安室真弓 (東京湾学会理事)
- 幹事 小坂一夫 (富津市文化財審議委員)
- 幹事 松本庄次 (富津公民館長)
- 幹事 小沢洋 (富津公民館主査)
- 幹事 平野孝 (富津藩の会協議会長)
- 幹事 鈴木元 (富津藩の会会員)
- 幹事 朝倉光夫 ((株) ドラムエンジニアリング)
- 幹事 西田信吉 ((株) 港建技術サービス)
- 幹事 長崎哲士 (彫刻家)
- 幹事 (事務局長) 島崎武雄 ((株) 地域開発研究所)
- 幹事 (会計) 高橋悦子 ((株) 地域開発研究所)

入会案内

東京湾海堡ファンクラブの活動主旨にご賛同いただける個人・法人(グループを含む)の入会を募集しております。

入会希望者は下記入会申込書にご記入のうえ、事務局までご送付願います。会費は下記口座にご送金ください。

東京湾海堡ファンクラブ入会申込書

入会申込み日	年 月 日	
フリガナ氏名 (個人あるいはグループ名)		
勤務先 (法人会員の 方は連絡先)	会社名/ 部署名	
	〒	
	住所	
	電話	
	ファクシミリ	
E-mail		
自宅	〒	
	住所	
	電話	
	ファクシミリ	
	E-mail	
会報送付先	勤務先	自宅 (希望する方に○をつけてください。)
E-mailによる会報の送付 (E-mailでの会報の可否について○をつけてください。)	E-mailでの会報の送付 (可 不可) (宛先: 勤務先 自宅)	

※連絡先が変更になったときは、ただちに事務局に連絡いたします。

銀行振込口座

「東京湾海堡ファンクラブ会計高橋悦子(トウキョウワンカイハウファンクラブカイケイタカハシエツコ)」
東京都民銀行 御徒町(おかまち)支店 普通預金 4011598

事務局

〒110-0015 東京都台東区東上野 2-7-6 東上野 T.I ビル
(株) 地域開発研究所内 東京湾海堡ファンクラブ事務局
事務局長: 島崎武雄 会計: 高橋悦子
電話 03-3831-2916 FAX 03-3836-4048
HomePage: <http://www.wup.jp/~kaihoufc/>
E-mail: kaihoufc@wup.jp

「海堡」 *kaihou* No.1

—東京湾海堡ファンクラブニュース— 創刊号

東京湾海堡ファンクラブ 2002年10月25日発行

◆ コラム ◆

海堡(かいほう)

海堡は、慣用読みで「かいほ」ですが、正しくは「かいほう」と読みます。“堡(ほう)”は砦を意味します。広辞苑には「海上に築城した砲台」と記載されていますが、実際に海堡を見ると、「人工の島に造られた要塞」と表現した方が正しく伝わると思います。海堡は英語で fort (要塞) となります。ただし、fort は海堡以外の陸上の要塞も含んだ言葉ですので、正確に海堡を表現しようとする、“fort on the sea” “fort on an artificial island” ではないかと思えます。

「海堡」という言葉を使い始めたのは明治に入ってからです。嘉永6年6月3日(1853.7.8)のペリー来航直後の7月25日に、^{にらやま}葦山の代官・^{ひでたつ}江川太郎左衛門英龍は富津岬の先に海堡を建造する必要性を説く意見書^{※1}を提出していますが、その意見書では「富津埋立御台場」あるいは「海中ニ新築御台場」という言葉を用いています。「御台場」は品川台場が整備されて以来、言葉の知名度が高いため、海堡を「海中台場」と説明した方が分かりやすいかもしれません。

日本の海堡は、明治時代から大正時代にかけて建造された東京湾海堡(第一海堡、第二海堡、第三海堡)しかありません。第一海堡と第二海堡、第二海堡と第三海堡、第三海堡と横須賀の走水砲台は、それぞれ約2.5kmの等間隔の距離を置いて建造されました。約2.5kmずつ離れているのは、海堡建造当初の大砲の有効射程距離(約3~4km)から求められました。【高橋悦子】
※1「大日本維新史料稿本137」東京大学史料編纂所蔵
[今回は西田明則について紹介します。]